

2023. 4. 9. 主日礼拝説教  
聖書：ルカによる福音書24章13～35節  
『道で起こったこと』

イースターおめでとうございます。本日の箇所は「エマオで現れる」という小標題の通り、イエスの復活を描いたルカの神学的頂点とすべき箇所です。端的に言えば、弟子たちが復活のイエスと歩いていても、目が遮られていて、それがイエスだとは分からなかったというのです。しかし、お互いが顔と顔とを合わせて対話をし、食事を共にする中で、ようやくそれがイエスであることに気づくという物語です。それでは何故弟子たちはそれがイエスだと分からなかったのでしょうか。顔がまったくの別人に変わっていたとでもいうのでしょうか。また何故途中からそれがイエスだと分かったのでしょうか。証拠でも見せて貰ったとでもいうのでしょうか。このような稚拙な理解は古来から後を絶ちません。

実は「見えないものが見えるようになる」という物語は旧約の昔から聖書にたびたび採用されています。例えば民数記22章22節以下に登場する「バラムとろば」の寓話があります。預言者バラムを乗せたろばは道の真ん中に剣を持った神の使いを見て恐れおののき道はずれます。バラムは怒ってろばをムチ打つのですが反対にろばに諭されます。その時、バラムにもようやく神の使いが見えたのです。そして、バラムは自らに果せられた使命に気づいてゆくのです。

言うなれば「見えないものが見えるようになる」とは自らの質の変革が求められてゆく途中の表現なのです。ですからバラムの物語も本日の弟子たちの逃避行も「道で起こったこと」という途中に舞台設定が施されてゆくのです。それも意気揚々として旅をゆく途中にではなく、失意や絶望といったネガティブな人生の途上に自分自身を再発見してゆくのです。

「二人の目」(16,31)という表現が象徴的に物語の前後に配置されます。16節以下は単なる客観的な歴史的事実の羅列です。二人はイエスと共に歩んだ宣教旅行の思い出の中でもこのような事実性しか記憶にないというのです。そんな偏りに対して、イエスはゆっくりと二人を解きほぐすかのように彼らの心の内に問いかけられてゆきます。客観性から主体性への旅なのです。

31節には「すると、二人の目が開け」と述べられます。ここで二人はそれまでの第三者に立ち続ける偏りから「わたしとは誰なのか。何をなすべきなのか」という当事者性に気づくのです。

わたしたちもいろいろな経験をしますが、すべてを受け止めているわけではありません。その大半は傍らに置き去りにしたまま生きているのです。それにその受け止め方自体も随分と偏っているのかと思います。関心の持ち方も受け止める力も人によってまちまちであったりするのです。いずれにしても受け止め切るはずもなく、ていねいに生きているつもりでも、お互い無造作な偏った生き方をしているものです。

自分だけは偏っていないとの宣言は虚しさしか残しません。この偏り、しかしこれこそ人間にとってその卑小さを示す事柄なのでしょう。

弟子たちは偏りに満ちた人々でした。それゆえ彼らはイエスの弟子なのです。しかし、「道」つまり日常性の中で彼らはイエスに問われつつ自らの卑小さに気づかされたのです。獲得したのです。そんな偏りを自らの根底に見出し、そこから目をそらさず歩み始めたのです。これこそが「復活」の出来事なのです。